

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月17日現在

機関番号：32649
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530807
研究課題名（和文） 少年院及び刑務所における矯正教育の構造と過程に関する教育学的研究
研究課題名（英文） A pedagogical study on the structure and processes of correctional education in the Japanese prisons and reform schools
研究代表者
高井良 健一（TAKAIRA KENICHI）
東京経済大学・経営学部・教授
研究者番号：50297339

研究成果の概要（和文）：

本研究では、教育学の観点から、少年院および刑務所における矯正教育の構造と過程に関する経験的分析が実施された。量的質問紙調査と質的フィールドワークに基づき、矯正教育のマクロな構造的特徴と、ミクロな処遇過程の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

This study conducted an empirical analysis on the structure and processes of correctional education in the Japanese prisons and reform schools from a pedagogical point of view. Based on quantitative surveys and qualitative fieldwork, it demonstrated some aspects of macro-structure and micro-processes of the Japanese correctional education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総 計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学／教育社会学

キーワード：矯正教育／ナラティブ／質的フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

教育学関連領域において、矯正教育はごく一部の領域を除いて等閑視されてきた分野である。しかしながら、近年においてこうした学術的動向には変化の兆しが見られる。2005年に組織され、研究代表者も参加して実施された「矯正施設における教育研究会（以下、「施設研」と略す）」においては、女子刑務所と少年院とにおいて、教育学の関心に基づくインテンシブな質的調査がなされた。しかし同時に、「施設研」の研究には、下記の

ような課題が残されたといえる。

第一に、矯正教育に対する教育学的問題設定と分析枠組みに関して、基礎的な土台を整えたとはいえ、それらは萌芽的なものに留まり、教育学研究そのものに示唆を与えるほどの考察は、まだなされてきていない。第二に、第一の点と関連して、具体的な質的調査の分析をもとにした実証的知見が少しずつ出始めているのだが、それらは総じて部分的な事象に焦点を合わせた知見であり、矯正教育の総体的構造の横断的解明、あるいは、長期に

わたる実践の展開過程を捉えるような、包括的な見通しに欠けている。そして第三に、第二の点の帰結として、矯正教育の構造と過程に関する実証的な知見が、まだ学問の世界にも、矯正政策・実践の世界にも、十分貢献できるほど深められていない、という点である。いわば、ようやく助走のための足場ができたという段階だといえる。

本研究は、以上の学術的背景を踏まえ、先行研究の土台を引き継ぎ、それを発展させ、同時に先行研究の限界を批判的に乗り越える新たな知見を産出することをめざす。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の三点である。

第一に、矯正教育の構造と過程に関する経験的／実証的な調査研究の多角的な実施である。これは、量的サーベイと質的フィールドワークに分けられる。

第二に、教育学の観点から矯正教育を対象化する際の問題設定について、教育学内に在るに意義を有するような問いと分析枠組みを組み上げていくことである。これには、学問領域横断的なネットワーク構築作業が含まれる。

第三に、第一と第二の目標を実現し、それをふまえて矯正教育に関する学問・政策・実践的提言を行うことである。

3. 研究の方法

本研究の作業課題と方法を端的にまとめれば、以下の四点となる。第一に、全国の矯正施設から複数の施設をサンプリングし、施設職員・被収容者を対象とした質問紙調査を実施することである（質問紙プロジェクト）。第二に、「施設研」によって過去に調査された三つの矯正施設（刑事施設1、少年院2）を対象に、質的な観点からの“追跡的”なフィールドワークを実施することである（フィールドプロジェクト）。第三に、本研究メンバーを中心として、さらに現代日本における矯正教育に関する知識・経験を有する専門家を招いたワークショップ・シンポジウム等を開催することで、矯正教育に関する専門家ネットワークを構築し、教育学的分析視角を練り上げることである（ネットワークプロジェクト）。第四に、以上三点のインプット作業をふまえ、本研究の知見をまとめて出版するとともに、政策的・実践的な提言を行うことである（アウトプットプロジェクト）。

4. 研究成果

(1) 研究全体を通して、いくつかの有益な知見を産出することができた。特に、実証的調査によって得られたデータをもとに、矯正教育領域と教育学とを架橋するような、学際的知見を提示することができたと考える。以下、

上記4つのプロジェクトごとに、研究成果を簡潔に記す。

(2) 法務省矯正局の協力のもと、全国の少年院の施設職員・収容少年を対象とした大規模な質問紙調査を実施した。また、一部の収容少年に対しては、収容期間を通して計3回の追跡調査を行い、施設収容中の変容過程や、施設職員の意識、教育的働きかけの効果等についての検討を行った。

(3) 「施設研」において行われたフィールド調査を引き継ぎ、少年院処遇に関するよりインテンシブなミクロ社会学的考察が行われた。SSTや認知行動療法等、そこで用いられている個別具体的な教育テクノロジーに関して、その教育的機能や導入史についての考察が深められた。また、施設収容中の被収容者の「変容」が、その者が語る物語（ナラティブ）の変容と密接にかかわっていることが示唆された。

(4) 法務省矯正局との合同調査を積極的に展開することに加え、そこで得られた知見に学術的観点からの分析を加えたうえでフィードバックすることが試みられた。また、矯正実務家との専門家会議や、研究分担者による政策過程への積極的参与など、教育学の側からの矯正政策への積極的関与が図られた。

(5) 上記(2)～(4)にかかる研究業績が多角的に産出されたほか、「施設研」時代から継続する研究蓄積をまとめ、近く、『現代日本の少年院教育』（名古屋大学出版会）、『少年院における教育の調査研究』（矯正協会）の二冊の論文集が刊行される予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- ① 伊藤茂樹・仲野由佳理・平井秀幸「少年矯正の教育テクノロジー ―SST(Social Skills Training)の導入過程からみる矯正合理性とは」『駒澤大学教育学研究論集』第28号、2012年3月、89～132頁。

（査読・無）

- ② 仲野由佳理「刑事施設におけるグループワーク——薬物依存離脱指導における物語化と指導者の役割に着目して——」広田照幸編『社会理論・社会構想と教育シ

ステム設計』日本大学文理学部広田研究室発行、2011年12月26日、264～282頁。
(査読・無)

- ③ 伊藤茂樹 2011「少年院における教育の調査研究—フィールドワークから見えてきたもの—」、『刑政』第122巻第11号、14～24頁。(査読・無)
- ④ 広田照幸・伊藤茂樹「社会の変化と日本の少年矯正——教育社会学の立場から」『犯罪社会学研究』第36号、犯罪社会学会、2011年10月、28～41頁。(査読・有)
- ⑤ 伊藤茂樹・五味靖「少年院在院者の生活と意識—性別、処遇区分、入院回数に注目して—」『駒澤大学教育学研究論集』第27号、2011年3月、63～96頁。(査読・無)
- ⑥ 村山 拓「法務教官の少年指導への自信と勤務意識との関連に関する考察」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』第7号、2011年3月、79～88頁。(査読・無)
- ⑦ 平井秀幸「『解放性』ゆえの“収斂”、“収斂”ゆえの『困難性』——受講者の視点に注目した、刑事施設における『特別改善指導(薬物依存離脱指導)』のミクロ社会学的分析(2)——」『研究紀要』80号、日本大学文理学部人文科学研究所、2010年10月、57～86頁。(査読・無)
- ⑧ 平井秀幸「『犯罪者/病人』役割への“収斂”？——受講者の視点に注目した、刑事施設における『特別改善指導(薬物依存離脱指導)』のミクロ社会学的分析(1)——」『研究紀要』79号、日本大学文理学部人文科学研究所、2010年3月、1～27頁。(査読・無)
- ⑨ 平井秀幸「認知行動療法は『社会的なもの』を無視しているのか？——刑事施設における『特別改善指導(薬物依存離脱指導)』のミクロ社会学的分析——」『教育学雑誌』第45号、日本大学教育学会、2010

年3月、83～106頁。(査読・無)

〔学会発表〕(計8件)

- ① 五味靖・山本宏樹・岡邊健・後藤弘子・平井秀幸「矯正教育の構造に関する男子少年院へのフォローアップ調査分析(1)」2011年10月 日本犯罪社会学会第38回大会(立命館大学 衣笠キャンパス)
- ② 山本宏樹・岡邊健・五味靖・後藤弘子・平井秀幸「矯正教育の構造に関する男子少年院へのフォローアップ調査分析(2)」2011年10月 日本犯罪社会学会第38回大会(立命館大学 衣笠キャンパス)
- ③ 村山拓・伊藤茂樹・山本功・土井隆義「法務教官の指導観に関する実証的研究—47少年院における少年院調査をもとに—」2011年9月 日本教育社会学会第63回大会(お茶の水女子大学)
- ④ 仲野由佳理・山本功・木村彩子・藤田絢香「非行少年の少年院への適応」2011年9月 日本教育社会学会第63回大会(お茶の水女子大学)
- ⑤ 「少年矯正の教育テクノロジー——SST(Social Skills Training)の導入過程からみる矯正合理性とは」(平井秀幸ほか2名)2010年9月18日 日本教育社会学会第62回大会(関西大学)
- ⑥ 「少年院における教育の実態に関する実証的研究(1)——在院少年の生活と意識——」(田中奈緒子ほか2名)2010年9月18日 日本犯罪心理学会第48回大会(目白大学)
- ⑦ 「少年院における矯正教育の構造に関する研究(1)」(伊藤茂樹ほか1名)2010年10月2日 日本犯罪社会学会第37回大会(国士舘大学)

- ⑧ 「少年院における矯正教育の構造に関する研究(2)」(後藤弘子ほか2名) 2010年
10月2日 日本犯罪社会学会第37回大会(国土舘大学)

〔図書〕(計1件)

- ① 上井隆義『少年犯罪〈減少〉のパラドクス』岩波書店、2012年3月29日、198頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高井良 健一 (TAKAIRA KENICHI)
東京経済大学・経営学部・教授
研究者番号: 50297339

(2) 研究分担者

廣田 照幸 (HIROTA TERUYUKI)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号: 10208887
伊藤 茂樹 (ITO SHIGEKI)
駒澤大学・総合教育研究部
研究者番号: 70251569

(3) 連携研究者

古賀 正義 (KOGA MASAYOSHI)
中央大学・文理学部・教授
研究者番号: 90178244
南 保輔 (MINAMI YASUSUKE)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号: 10266207
土井 隆義 (Doi TAKAYOSHI)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号: 60217601
後藤 弘子 (GOTOU HIROKO)
千葉大学・法科大学院・教授
研究者番号: 70234995
田中 奈緒子 (TANAKA NAOKO)
昭和女子大学・生活機構研究科・准教授
研究者番号: 50277935
岩田一正 (IWATA KAZUMASA)
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号: 70338573